慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）1211（大代表）

新春特別座談会

新病院で迎えた2023年の歩み

慶應医学の臨床・研究・教育はどこに向かう

2022年５月に慶應義塾大学病院のエントランス棟工事が完了し、新病院のグランドオープンとなりました。COVID-19の感染状況は一進一退を繰り返しながら徐々に以前の姿をとり戻しつつありますが、withコロナを経てさまざまなものが変化しています。そのような中における三四会、医学部、病院、信濃町キャンパスそれぞれの取り組み、連携体制はどのようになっていくのでしょうか。昨年を振り返るとともに、新しい１年に向けた思いなどを語り合っていただきました。（本文中は敬称略）

■聞き手：医学部新聞編集委員長

病院のグランドオープンなど厳しさの中にも明るい話題が

門川　新年明けましておめでとうございます。まずは、コロナ禍が続きながらも、さまざまなものが動いた2022年の振り返りからお願いします。

武田　今日はお集まりいただきありがとうございます。1920年設立の三四会は2020年に100周年を迎え、病院と合同での記念祝賀会の開催、三四会百年史の編纂といった百年記念事業を行ってきました。また、昭和24年3月に第1号が発行されて以来今号で854号を迎えた慶應医学部新聞のほぼ全号を揃えた縮尺版を作り、三四会で保管したほか北里記念医学図書館や慶應義塾福沢研究センターに寄贈しました。これにより「歴史を残す」ということについては、予定していた事業を一通り終えました。しかし、ここまでを振り返ってみると、ICTについてはまだまだ弱いと痛感しています。三四会が医学部、病院と一緒になって連携してやっていくためにも、その部分を強化する必要がありますから、ICTは2023年以降の課題だといえます。

北川　信濃町キャンパス担当常任理事の立場からお話すると、2022年最大の出来事としてはやはり病院エリアのグランドオープンが思い浮かびます。三四会の皆様をはじめとする塾内外の皆様の多大なるご支援により、非常に広々として働きやすい環境を与えていただいたことに心から感謝しています。通院してくださる患者さんの笑顔も増えたように感じています。また、金井医学部長と松本病院長を中心に信濃町キャンパス全体の運営が安定して着実に発展できた年でもありました。金井医学部長が若手教員や学生諸君の言葉に大変熱心に耳を傾け、心を配っていたことが強く印象に残っています。松本病院長にはコロナ禍の中で病院長のバトンを引き継いでもらいましたが、そのような厳しい状況にあっても経営は非常に堅調に動いています。2022年度は教職員がコロナ感染あるいは濃厚接触者となって次々と欠勤する厳しい状況の中で、加藤看護部長と共に人員配置をやり繰りしながら数多くの手術を行い、懸案であった日本医療機能評価機構による病院機能評価受審についても教職員が一丸となって対応してくださいました。皆様の頑張りに感謝の気持ちでいっぱいの一年でした。

金井　医学部長に就任して以来、医学部がきちんと新年を迎えられるかどうか、ヒヤヒヤしながら毎日を過ごしてきましたが、振り返ってみると2022年は素晴らしい一年でした。久しぶりに対面での入学式を開催することができ、徐々に対面授業やクラブ活動も再開して日常が戻りつつあるなど、コロナ後を見据えた素晴らしい1年を体験できたかと思います。昨年末に飛び込んできた大きなニュースとしては、天谷常任理事をはじめ医学部の基礎医学の先生方がしっかりと計画を立てて進めてくれた「世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）」への採択があります。日本の私大で初めてとなる大きな成果をとても嬉しく思っていますし、無事採択となったことにほっとしています。

松本　病院にとっては2022年も新型コロナ感染で厳しい年でしたが、一方で、非常に充実した年でもあったと思います。まずは約10年間かけて続いてきた新病院棟建設プロジェクトが完結し、新病院がグランドオープンしました。皆さまのおかげでこのような素晴らしい環境を与えていただいたことに深く感謝をするとともに、身が引き締まる思いでもあり、さらに充実した医療を提供できるよう教職員一同で取り組んでいるところです。2022年には新型コロナウイルスの第6、7、8波が発生し、特に第7波では先ほど北川常任理事がおっしゃったように多くの教職員が欠勤するという極めて厳しい状況にありましたが、お互いに支え合って病院機能を維持して乗り切ることができました。

また、特定機能病院としての受審でハードルが高くなった病院機能評価についても、1年以上をかけて教職員が一丸となって準備をして、9月13日から15日の3日間の受審を無事終了し、機構からも一定のご評価を頂きました。準備の過程で慶應病院の医療の質が向上したと思っていますので、今後も引き続き質の向上に取り組んでいきたいと思います。

武田　1号館のことは私からもお礼を申し上げたいと思います。病院長時代、何もない状態の基本設計から始めた病院が無事グランドオープンを迎えたことを心から嬉しく思っています。私にとって病院は、我が子というか、嫁に出した娘のような存在かもしれません（笑）。

コロナ禍も3年目に突入して徐々に対面活動が再開

門川　2022年は少しずつ対面での活動も再開したようです。そういった面での変化は見られましたか。

武田　そうですね。2019年3月ごろから全てストップしていた支部会も、2021年後半からいくつか再開して、2022年には全国支部長会を開催することができました。支部によってリアル開催やオンラインとのハイブリッド開催などの違いはありますが、少しずつ再開しているようです。

北川　慶應義塾は2021年にワクチンの大規模職域接種を行い、2022年4月からキャンパスライフを取り戻すという目標を掲げて積極的に動いてきました。2022年には三田祭も開催されましたし、ハイブリッド開催となった連合三田会大会もかなり盛り上がり、かつての賑わいが戻ってきたと感じました。これまでの入学式では、塾歌を斉唱せずに放送を聞くだけでしたが、秋の入学式では、マスクをして斉唱することができていつも以上の感動があり、そのように日常が戻ってきたところもあり、少しずつ光が差してきたなということをキャンパス各所で感じています。一方で、医学部や病院は医療現場という特殊性から他のキャンパスより我慢を強いられることが多かったので、医学部生にとっては辛かっただろうと思います。

金井　2022年は海外の学会活動への参加が再開した年になりましたね。国際学会に参加しないということは学問的にも非常なディスアドバンテージになりかねませんが、慶應の先生たちは海外で素晴らしい成果を発表する機会を始めてくれました。コロナ禍においても学問を止めないという観点でも、コロナ後を見据えて海外活動を始めた年になったと思います。

門川　昨年2月のアメリカ留学も、あの時期に判断するのはとても難しかったのですが、北川常任理事と塾長が相談の上で行かせるという判断を下してくれたお陰で十数人の学生にできました。ほかの大学は来年度から行うことができました。

働き方改革やICT強化など今取り組まなければならない課題

門川　現状の課題として、働き方改革や連携体制の構築などがありますが、2023年以降これらの課題にはどのように取り組んでいきますか。

松本　医師の働き方改革は非常に重要なことであり、多くのステップがありますので、工程表に従って一つずつクリアしていこうとしています。まず勤怠管理をしっかり行い、外勤や当直などの兼業、副業を含めた各診療科の勤務実態の把握とともに、労働時間短縮の取り組みを進めてきました。研究活動を含めた自己研鑽をどのように定義するかは難しく、議論をしながらコンセンサスを形成しているところです。2024年4月から制度がスタートしますので、特例水準該当者の特定、労働時間短縮計画を策定し、今年3月までに準備を終えて申請をする予定です。その体制で今と同じだけの臨床業務が回るのかどうか、関連施設に派遣している人たちのことも併せて検討していく必要があります。

金井　働き方改革に関連して、女性医師の活躍についても検討を進めています。例えば、保育園の整備は専門医プログラムにも要求される案件ですから、喫緊の課題の一つです。女性に限らず男性の医師たちも育児をしながら仕事をしやすい環境を実現できるよう、医学部・病院とも連携しながら体制を整えていきたいようやく検討を始めるという状況にもかかわらず、行かせてもらえたことに学生たちは本当に感謝していました。

北川　私もかつて南米派遣団に参加させていただいた国際医学研究会の海外渡航も3年ぶりに再開され、学生さんたちも貴重な体験をできたようです。

松本　コロナ禍が始まった当初は相手がどのようなものかもわからずに対応に大変苦労しましたが、最近はコロナ診療と通常診療のバランスがうまく取れるようになるなど、病院も進歩してきました。当初、会食をするときは2名までという制限を設けて、教職員も感染防止対策のために極めて厳格な生活を強いられてきましたが、少しずつ緩和をしていきました。社会的な状況が緩和されてきた昨年後半には、慶應病院の教職員も自らの行動の律し方を身につけてきたこともあり、病院が厳しく行動をコントロールするという方向から、個人の良識に任せて感染対策をしながら社会活動や交流活動をしてもらうという方向に舵を切っていくことにしました。昨年11月から会食の人数制限も撤廃し、学生の活動についても同様に制限を緩めています。

門川　昨年の連合三田会大会では三四会の活動が活発でしたが、三田会における三四会の位置づけはどのようになっていくのでしょうか。

武田　私が会長になって最初にみなさんにお願いしたのは、地域三田会と三四会支部の合同または役員の相互乗り入れにしてほしいということでした。最初は数カ所だけでしたが、徐々に相互交流が始まっています。そもそも三四会は連合三田会の中に含まれる組織ですし、医師の集まりである三四会では三田の皆さんの健康を預かる活動を各地で行っています。三田会の方から「どうしたら慶應病院にかかれますか」と聞かれることが多いので、支部の三四会の先生に聞けばつながれますよという宣伝をしてきました。今年はICTの強化をする中で、連合三田会とソフト面でつながることができればとも思っています。連合三田会が実施しているデジミタと連携することでソフトの面での連携ができれば、慶應病院に患者さんを送りやすくなりますし、治験で患者さんを集めたいというときにデジミタを通じて情報を流すこともできると思っています。例えば一貫校の生徒たちの健康データは一元的に管理されていませんが、データを活かしてさらに質の高いフォローアップができるように、保健管理センターの若手医師が自ら声を挙げてくれたことをきっかけに構想に着手したところです。義塾全体で見ても必ずしもDXはまだまだ進んでいませんが、そのような未来に向けた取り組みが始まろうとしています。医療におけるさまざまなデータのインフラ整備は最重要課題の一つですから、信濃町と義塾が協力しながら進めていきます。

武田　新たに作られる予防医療センターに地方から受診された場合、地元に戻ったときのフォローアップができる医師を三四会から紹介してほしいといわれていますし、ICTを強化することでそういうやりとりがスムーズになればとは期待しています。

金井　私が昨年1年間心掛けていたのは、若い人たちと対話することでした。教授会構成メンバーの准教授の方全員と一人ひとり話す機会を設けさせてもらい、准教授講師会のメンバーとも執行部メンバーも交えてオンラインで話を聞いてきました。そのように直接話を聞くことでアイデアが涌いてくることもありますから、今年は去年以上にたくさんの方と対話をしていくつもりです。最近では日吉の先生方が自らたくさんのアイデアを出してくれるようになりました。対話を重ねる中で医学部の皆さんが望んでいることもわかるようになってきましたし、その一つ一つの対話が次の30年、次の100年につながるものだと信じて、今年も医学部に関わる皆さんとよく話し合いながら前に進んでいきたいと思っています。

松本　新病院棟建設事業の当初からのコンセプトが「新病院棟を中核とした世界に冠たる総合医学府の構築」でしたから、2023年はこのコンセプトを本格的に実現する年にしていきたいと思います。それがご支援いただいた皆様に対する恩返しにもなると思っています。

新病院棟構想時に掲げられた具体的なポイントは4点あります。1つは慶應病院が担うべき高度急性期医療をブラッシュアップして質の高い医療を提供すること。全ての診療科と部門が結集して難治性疾患に取り組み、今約30あるクラスター部門もさらに充実させていきます。2つ目は、基礎臨床一体型の臨床研究をしっかりと進めていくこと。昨年はiPS細胞を用いた臨床研究がスタートしましたが、そういったものをどんどん開花させられる年にしていきたいと考えています。3つ目が災害拠点としての充実です。1号館が完成したことで慶應病院の防災機能は格段に高くなりましたので、直下型地震などの災害にもしっかりと対応できる体制の構築にも取り組んでいきます。そして最後が医・看・薬の医療人の育成で、医学部や他学部の先生方とも連携しながら進めていければと思います。

武田　新病院のグランドオープンを迎えられたことは本当に喜ばしいことですが、それで終わりではなく、信濃町や医学部の今後を考え続ける必要があります。本日話題になったさまざまな課題について、義塾、医学部、病院の皆さんと協力してやっていくことが大事ではないかと思います。三四会員の皆さん、今年もどうぞよろしくお願いします。

「コロナ後」を見据えて動き始めた慶應医学の2023年とは

門川　最後に、2023年の抱負と課題をお聞かせください。

武田　今やるべきことは、次の100年に向けて三四会が何をやるべきかをしっかり考えることだと思っています。私が三四会長に就任して9年になりますが、これまでずっと同窓会は何をするべきか考えてきました。中学や高校などの一般的な同窓会は集まって懇親をしますが、三四会は同じ職業の仲間であるプロフェッショナリズムを備えた集団ですから、普通の同窓会とは違うところがあります。支部会では患者さんのことで相談できる職業のつながりがありますし、教室ごとの勉強会や医学や人事の情報交換を行うなど、普通の同窓会とは意味が違い、連携という機能に重きを置いている組織です。これまでも医学部や病院と強く連携してきましたが、連携強化のためにもこれまで弱かったICTを構築し直して、その手段を用いてどこまで機能を拡充し、社会との結びつきを強めていけるのかをこの1年で考えていきます。そのために若くて優秀な先生たちを仲間に加えて動き始めたところですので、皆さんの力を借りながら、次の100年に向けての手段を作り上げる1年にしたいと考えています。

北川　慶應義塾では2022年1月に「未来医療構想会議」を立ち上げて、医学部だけでなく看護医療学部、薬学部、健康マネジメント研究科など関連部門の皆さんにも参加していただき、慶應義塾として目指すべき医学・医療のあり方を模索するという目標で活動してきました。そこで中心となるのが「新しい予防医療センター」「AIホスピタル」「JSTのCOI-NEXT（共創の場形成支援プログラム）」という3本柱です。その中でも喫緊の課題となるのが、2023年10月の予防医療センターの虎ノ門・麻布台地区への拡張・移転です。病院機能の一部を信濃町キャンパスの外に出すという初めての試みで、医学部と病院だけでなく他の医療関係部門の皆様にも参画していただいたことに深く感謝をするとともに、身が引き締まる思いでもあり、さらに充実した医療を提供できるよう教職員一同で取り組んでいるところです。2022年には新型コロナウイルスの第6、7、8波が発生し、特に第7波では先ほど北川常任理事がおっしゃったように多くの教職員が欠勤するという極めて厳しい状況にありましたが、お互いに支え合って病院機能を維持して乗り切ることができました。

また、特定機能病院としての受審でハードルが高くなった病院機能評価についても、1年以上をかけて教職員が一丸となって準備をして、9月13日から15日の3日間の受審を無事終了し、機構からも一定のご評価を頂きました。準備の過程で慶應病院の医療の質が向上したと思っていますので、今後も引き続き質の向上に取り組んでいきたいと思います。

武田　1号館のことは私からもお礼を申し上げたいと思います。病院長時代、何もない状態の基本設計から始めた病院が無事グランドオープンを迎えたことを心から嬉しく思っています。私にとって病院は、我が子というか、嫁に出した娘のような存在かもしれません（笑）。

コロナ後の医療人育成と連携強化

門川　昨年の連合三田会大会では三四会の活動が活発でしたが、三田会における三四会の位置づけはどのようになっていくのでしょうか。

武田　もうひとつ、天谷雅行常任理事、柚﨑通介研究科委員長、本田賢也教授などのご尽力により採択されたWPIの本格稼働が始まります。医学部が中心となって採択に至ったWPIも、理工、薬学部との横断的な取り組みになりますが、今後このような複数学部による横断的な取り組みが増えると思いますので、慶應義塾が発展していく大きなきっかけとなる年になるのではないかと思っています。

門川　昨年の連合三田会大会では三四会の活動が活発でしたが、三田会における三四会の位置づけはどのようになっていくのでしょうか。

武田　私が会長になって最初にみなさんにお願いしたのは、地域三田会と三四会支部の合同または役員の相互乗り入れにしてほしいということでした。最初は数カ所だけでしたが、徐々に相互交流が始まっています。そもそも三四会は連合三田会の中に含まれる組織ですし、医師の集まりである三四会では三田の皆さんの健康を預かる活動を各地で行っています。三田会の方から「どうしたら慶應病院にかかれますか」と聞かれることが多いので、支部の三四会の先生に聞けばつながれますよという宣伝をしてきました。今年はICTの強化をする中で、連合三田会とソフト面でつながることができればとも思っています。連合三田会が実施しているデジミタと連携することでソフトの面での連携ができれば、慶應病院に患者さんを送りやすくなりますし、治験で患者さんを集めたいというときにデジミタを通じて情報を流すこともできると思っています。例えば一貫校の生徒たちの健康データは一元的に管理されていませんが、データを活かしてさらに質の高いフォローアップができるように、保健管理センターの若手医師が自ら声を挙げてくれたことをきっかけに構想に着手したところです。義塾全体で見ても必ずしもDXはまだまだ進んでいませんが、そのような未来に向けた取り組みが始まろうとしています。医療におけるさまざまなデータのインフラ整備は最重要課題の一つですから、信濃町と義塾が協力しながら進めていきます。

武田　新たに作られる予防医療センターに地方から受診された場合、地元に戻ったときのフォローアップができる医師を三四会から紹介してほしいといわれていますし、ICTを強化することでそういうやりとりがスムーズになればとは期待しています。

金井　私が昨年1年間心掛けていたのは、若い人たちと対話することでした。教授会構成メンバーの准教授の方全員と一人ひとり話す機会を設けさせてもらい、准教授講師会のメンバーとも執行部メンバーも交えてオンラインで話を聞いてきました。そのように直接話を聞くことでアイデアが涌いてくることもありますから、今年は去年以上にたくさんの方と対話をしていくつもりです。最近では日吉の先生方が自らたくさんのアイデアを出してくれるようになりました。対話を重ねる中で医学部の皆さんが望んでいることもわかるようになってきましたし、その一つ一つの対話が次の30年、次の100年につながるものだと信じて、今年も医学部に関わる皆さんとよく話し合いながら前に進んでいきたいと思っています。

松本　新病院棟建設事業の当初からのコンセプトが「新病院棟を中核とした世界に冠たる総合医学府の構築」でしたから、2023年はこのコンセプトを本格的に実現する年にしていきたいと思います。それがご支援いただいた皆様に対する恩返しにもなると思っています。

新病院棟構想時に掲げられた具体的なポイントは4点あります。1つは慶應病院が担うべき高度急性期医療をブラッシュアップして質の高い医療を提供すること。全ての診療科と部門が結集して難治性疾患に取り組み、今約30あるクラスター部門もさらに充実させていきます。2つ目は、基礎臨床一体型の臨床研究をしっかりと進めていくこと。昨年はiPS細胞を用いた臨床研究がスタートしましたが、そういったものをどんどん開花させられる年にしていきたいと考えています。3つ目が災害拠点としての充実です。1号館が完成したことで慶應病院の防災機能は格段に高くなりましたので、直下型地震などの災害にもしっかりと対応できる体制の構築にも取り組んでいきます。そして最後が医・看・薬の医療人の育成で、医学部や他学部の先生方とも連携しながら進めていければと思います。

武田　新病院のグランドオープンを迎えられたことは本当に喜ばしいことですが、それで終わりではなく、信濃町や医学部の今後を考え続ける必要があります。本日話題になったさまざまな課題について、義塾、医学部、病院の皆さんと協力してやっていくことが大事ではないかと思います。三四会員の皆さん、今年もどうぞよろしくお願いします。

三四会長
武田 純三（52回）

常任理事
北川 雄光（65回）

病院長
松本 守雄（65回）

医学部長
金井 隆典（67回）

医学部新聞編集委員長
門川 俊明（70回）

公　告

三四会員各位

慶應義塾大学医学部三四会の役員および評議員の任期は来る令和５年６月16日を以って満了します。三四会会則施行細則第12条により、三四会役員および評議員の改選を施行いたしますことを公告します。

令和５年１月５日

三四会会長　武田　純三

（本掲示を以って三四会会則施行細則第12条の公告に代えます）

鑑賞知来

今年の干支は兎ですね。昨年の出来事を振り返ると色々思い出しますが、カタールで開催されたサッカーワールドカップはその一つです。サムライジャパンがサッカー列強のドイツ、スペインを打ち破った。これは世界中のサッカーファン、関連者にとっての衝撃だったようです。私も、海外のドクターや友人から、いいね！のメッセージを多数もらいました。サッカーに疎い私にとりましては、個の力と、チームの力について考える良い機会となりました。

私は2001年に慶應の形成外科に入局しました。今はDクリニック新宿の院長として日々を過ごしています。Dクリニックは男性の薄毛、男性の更年期に特化したクリニックです。薄毛治療の分野では、薄毛治療薬が国内で上梓される遥か前、1999年から海外の薬剤を用いて治療を行ってきた老舗クリニックです。男性更年期（加齢男性性腺機能低下症候群）の分野でも、2003年に男性医学の父、熊本悦明先生（札幌医科大学名誉教授）がDクリニック内に日本臨床男性医学研究所を開設し診療を開始し今日に至る、老舗クリニックになります。DクリニックはYou Tube「ドクターYou Tube」を通じて一般の方々に医療情報を発信しています。私も所属医師の一人として出演しています。時々、外国の友人から、Love it!とコメントをもらいます。日本語音声で英語字幕はありませんので内容はあまり伝わっていないと思いますが、英語圏の感覚では、いいね！に相当するようです。

兎年の今年が、Love it＝ラヴィット、いいね！で溢れる一年になる事を願っています。冒頭で触れた、個の力とチームの力について自問自答する事がその一助になると思います。個の力とチームの力を磨いていけば、我々は更に輝けるはずです。

（Dクリニック新宿院長　小山太郎　80回）